

復活節第5主日礼拝

2023年5月7日（日）

題 「夜が明けたころ」

テキスト：ヨハネによる福音書21章1～14節

皆さま、おはようございます。

今日の聖書の個所には、よみがえられたイエスがその姿を弟子たちに3度目に現されたことが記されています。そして主イエスは弟子たちと共にガリラヤ湖畔で朝食をとられました。

共にみ言葉に聞きましょう。

◆イエス、七人の弟子に現れる

1:その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。

ティベリアス湖畔という場所は、聖書に良く出てくるガリラヤの湖のことです。ガリラヤ湖は淡水で多くの魚が住んでいたようです。イエスの弟子たちの多くはこのガリラヤ湖の漁師たちでした。とてもきれいな湖です。

イエスの弟子たちは、故郷であるガリラヤ地方に帰って来ていたのです。

そこで、

2:シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。

ここで、弟子たちの筆頭格であったシモン・ペトロの名前が久しぶりに登場しています。イエスが十字架につく前に、イエスを知らないと言ったペトロでした。

彼はその心の内にどこか後ろめたさを感じていたかもしれません。彼らは、復活されたイエスに出会えた後、故郷ガリラヤに戻ったのです。そうすることしかできなかったのかもしれません。マルコによる福音書によれば、イエスの死後墓に向かった女性たちに表れた白い長い衣を着た天使と思われる若者は「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる」と告げています。

この時ガリラヤ湖を前にして、

3節でシモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言いました。「彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。」と記されています。

彼らは昔の仕事に戻ったのです。しかし、ここで気づくことは、この時も、やはり呼びかけたのは、リーダーのペトロだったということです。

彼らは漁に出かけますが、「しかし、その夜は何もとれなかった。」と記されています。実は、このことは初代教会の初期の伝道、宣教の姿を表しているとも言われています。伝道が困難で、イエスにある群れ、教会は苦難の時を忍耐して生きることとなったのです。これは歴史的な事実であると思われます。今日コロナ禍後の洲本教会にとっても、またキリスト教会全体にとっても、苦難の時ではないかと思います。

それ故に今日の聖書の個所のことばは、今日教会に集うわたしたちに語りかけられていることばだと思うのです。

さて、ガリラヤ湖畔の聖書個所に戻りますと、

4:既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。

ここで学ぶことは、イエスは、よみがえられたイエスは、暗闇の中に立っておられたということです。このことが、苦難の中を生きる者たちや闇の中を生きているかのような教会、キリスト者の群れにとって、そのまま光であり、希望となるのです。「夜が明けたころ、」とあります。「明けない夜はない。」昔から伝えられています。この言葉はシェイクスピアの戯曲「マクベス」にも出てく言葉と言われます。主イエスにあっては、明けない夜は、暗闇はないという信仰体験から来る希望の言葉です。夜の中にも、暗闇の中にも光は灯っている。それは神のイエスさまのとももし火であり光なのです。そしてその光は消えることはないのです。

「だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。」これもまた、弟子たちや後の信仰者、ひいては、現実に苦闘する私たちの姿でもあるように思えるのです。しかし、そのような苦闘する弟子たち、わたしたちの姿を主イエスは、神はすでにご存知で、見ておられるのです。そして不思議な方法で手を差し伸べてくださるのです。

5:イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。イエスは愛する弟子たちに呼びかけられたのです。弟子たちに任せることは任されますが、決してほってはおかれないのです。見捨てられないのです。

6:イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上

げることができなかったのです。

主イエスのことばが、夜明けに響くのです。そこに不思議な驚くべき出来事が起こりました。6:イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまりに多くて、もはや網を引き上げることができなかった。」水温の関係で昼間は湖の底にいる魚が夜になると水面に近くに上がってくるので、この辺りの漁師は夜中に刺し網を仕掛けて漁をしたとのこと。弟子たちが、イエスの言葉に従って行動した時、弟子たちの思いを超えた大漁の出来事が起こったのです。私はこの状況から今後教会の歩みを思い、リバイバルという言葉を想像しました。信仰復興運動と言われます。教会の再生、新しい歩みと受けとめてもよいと思います。それは、新しく始まって行く歩みです。わたしたちが年齢を超えて、教会の交わりが、神の愛の力である聖霊を受け、神と主イエスに対する信頼から来る祈りと賛美と交わりから生まれる歩みだと思います。

大漁に出くわした弟子たちはどうしたでしょうか。

7:イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。

シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をま
とって湖に飛び込んだ。

ここでペトロに「主」だと言った人物は、今日の多くの聖書学者たちは弟子のヨハネのこと。つまりこのヨハネによる福音書をまとめたと言われる人物のこととみなしています。「シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をま
とって湖に飛び込んだ。」このことには、厳密なことは分からないようですが、裸同然のような体の上にま
とっていた、服の裾を捲りあげて湖に飛びこんだとの理解もあるようです。

その後のことですが、

8:ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。

ペキスは 45c ほどで、200 ペキスは 90m程となります。弟子たちは比較的岸に近い場所で漁をしていたようです。

さて弟子たちが陸にあがってみると、すでに食事の用意がなされていたのです。イエスさまが弟子たちのために備え、用意してくださっていたのです。

9:さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。

10:イエスが、「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われた。

11:シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三

匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網

は破れていなかった。百五十三匹とは当時この地方でとれる魚の種類とされています。

この出来事から伝道について、広く世界宣教を想像する人たちもいたようです。イエスの名を伝え広げて行く働きを表していると受けとめることはできるように思えるのです。

12:イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはいずれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。

13:イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。

人と人が食事をするのは、温かい心をつなぐこともあれば、逆に亀裂を生むことも現実にはあるようです。楽しくない食事の時ほど苦痛を感じる時はないのかもしれませんが。そのような時はどんな豪華なものも、時に苦痛となるのです。それ故、旧約聖書の箴言 15 章 17 節 (P1010) には「肥えた牛を食べて憎み合うよりは、青菜の食事で愛し合うほうがよい。」との戒め、忠告のことわざも古くからあるのです。

イエスさまは弟子たちとよく食事をされました。これは主にある温かい交わりの時なのです。ここが肝心なことだと思います。楽しいと思える食時が必要だと思えるのです。それは心の交流がある、笑みが絶えない、みんな安心できる食事の時です。そのような場に人は自ずから集まってくるでしょう。

これからのキリストの群れ、教会のこととして覚えて起きたいことは、イエスを伝えることは、和やかに一杯のお茶を共にする、食べることの交わりを重ねることにおいて確かに始まるのだということです。

14:イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。

十字架の主はよみがえられた、希望の主なのです。

洲本教会のリスタート、再出発に備える時がいよいよ来つつあるように思います。主イエスが共にいてくださるなら、たとえ大きな波が来ても進んでいけるのですから、すでに教会という舟に乗ってくださっている主イエス、教会という船の持ち主である船主である主イエスを信頼して舟の点検と整備を怠らず前に向かって歩み出したいと願います。

皆様の上に主の平安を祈ります。共に黙想しましょう。